大仙市教育研究所 所報

けやき

第5号　2009年3月23日発行

「共苦　共歓」

大仙市教育委員会 教育長 三　浦　憲　一

逆境の時代の中において、大仙の子どもたちが学習に、スポーツや文化面、各種交流活動に大活躍してくれたことを大変うれしく思っております。直接、間接的に支えていただいている皆様方に改めて感謝申し上げます。

ある詩人は、『今、未来を担う子どもたちから、遠ざかっているものが第一に自然であり、第二に働く父親の姿であり、家庭における母親の笑顔である。反対に、子どもたちが近すぎたものに「ケータイやゲーム機等」がある。また、子どもたちから消えていくものもある。「遊びの集団、三世代家族、家事労働」である』と述べております。

今の子どもたちは、物には恵まれているかもしれないが、生きるために必要な知恵や経験を容易に獲得しにくい社会に身を置いているのであります。さらには、このような状況が、国際比較で表れている日本の子どもの自尊感情の低さや、学ぶ意欲の低調傾向を生む要因の一つになっていると考えられます。

一方、今日の学校は、躾や情操教育、一部保護者対応、食育や環境教育、情報教育、小学校英語、武道の必修化等、新学習指導要領への移行に伴うものも含めて、諸々の負担増が求められており、教職員本来の仕事に専念しにくい状況も生じております。

大仙市教育委員会では、国の動向も見据え、子どもたちにとってよりよい環境を整えるためにも、学校教育や社会教育、保護者や市民、行政等がそれぞれの役割を果たしつつ、相互に不足部分を補完しながら一体となった教育を進める「学校支援地域本部事業」を立ち上げました。それぞれの得意分野を出し合い、生かし合い、地域ぐるみで学校を支援し、子どもの教育の推進に役立てようとする事業であります。神岡地域、協和地域をモデルに、大仙市の他の６地域にも拡大してまいります。

子どもたちには、校種を超えた教職員や経験豊かな先輩、身近な若い方々等の地域の先生を含めた、多様な人々と交流する中で、自己表現する経験を重ね、自分への自信を高めてほしいと願っております。

このような時代こそ、教職員はチーム全体で確かめ合いながら、冷静に牛歩のごとく、安定した一歩を刻みたいものです。しかし、「安定」と「安住」は違います。世の中の状況、県や市の現況をしっかりと捉え、今年は、「人を大切に」「物を大切に」「時間を大切に」の精神で充実感をもたせ、乗り越える「生きる力」の育成にあたっていきたいものです。

ふるさとのSHOKUZAI（食材）で育つ　北神の子

S～新鮮野菜をおいしく　H～早ね早おき朝ごはん　O～親子地域連携　K～給食をおいしく　U ～内からの健康を考えて
Z～全校児童で一人一鉢　A～朝、昼、晩しっかり歯磨き　I～命あるもの 作ってくれた人に感謝

大仙市立北神小学校 研究主任　井 上 裕 子

1．はじめに

本校の花壇は毎年見事に花を咲かせます。子どもたちも輝きを持ち優しく素直です。４年ほど前、高学年に体調不良で保健室利用が目立ちました。原因は「寝る時間が遅い、朝ご飯抜き、野菜嫌い」でした。そこで基本的生活習慣の定着をめざし、18年度の学校重点目標を『早ね　早おき　朝ごはん』として推進しました。19年度は県の「食に関する指導」推進協力校、20年度は文科省の「子どもの健康を育む総合食育推進事業」実践協力校として「食の指導」を実践してきました。

2．「食に関する指導」の概要について

[研究主題] ～「見つめよう食生活
めざそう健康な心と体」

[重点目標]

① 食事の重要性、喜び、楽しさを知る
② 心身の成長や健康の保持増進の上で望ましい栄養の摂り方を理解し、自ら管理していく能力を身につける
③ 地域の産物、食文化や食に関わる歴史等を理解し、尊重する心をもつ

上記をふまえて５つの視点で実践しました。

【視点１】《楽しい学校給食》

給食は全校一斉、学級、異学年グループで行っています。準備やマナー、食への感謝の心が育つように留意し行っています。地産地消の意識を高め食材への興味・関心が持てるように食材の紹介やクイズ、栄養教諭のコメントで意識化を図っています。給食時の全校お誕生日会では一人一人を全校でお祝いしています。今年度、学校給食の全国表彰を受けました。

【視点２】《授業実践》

生活科、総合的な学習、家庭科を中心に栄養教諭とＴＴの授業実践、また、保護者参加型授業に留意し保健センターと食生活改善推進委員をゲストティーチャーにお願いしています。調理時には学校の田や畑で収穫した作物や旬の食材を使用するようにしています。

【視点３】《児童主体の体験活動》

活動の目玉は一人一鉢野菜の栽培活動です。自分の嫌いな野菜を育てて食べたら好きになれるかもしれないという児童の発案です。今年度で２年目です。全校田植えや畑は10年以上続いており、以前「食農教育」にも掲載されました。児童集会「元気もりもり集会」も６回目を迎えました。

【視点４】《家庭・地域との連携》

家庭、地域との連携が「食の指導」には重要な位置を占めています。特に「早ね　早おき　朝ごはん」のチェックカードは毎月の家庭との大切なパイプです。

【視点５】《環境つくり・広報活動》

児童会から全校への発信の場として『元気もりもりコーナー』があります。食育推進だよりは家庭や地域に向けて年３，４回発行し、学校ＨＰも随時更新しています。

3．「食に関する指導」の成果と課題

食への意識の高まりが家庭を始めとして学校の中、子どもの心にも強く意識されています。食べ物のバランスや効用、また病気の予防と健康について話をする機会が増え、本校の原点「早ね　早おき　朝ごはん」の推進で朝ご飯摂取率が100％達成という日が増えてきました。基本的生活習慣も身に付いてきています。特に体調不良の子が減少して保健室来室率、欠席率が減少していることが活動の成果の相乗効果として現れています。また本学区は食材が豊富で学校給食に提供する生産者がいます。地産地消の意識も向上し、子どもも地域の食材の豊かさを認識してきています。

「食の指導」の集大成として11月に開催した食育フォーラムでは、コーディネーターを栄養教諭、パネリストを学校医・食生活改善推進委員・生産者・保護者で、それぞれの立場から意見交換し、参加者がグループに分かれ話し合いました。多方面からの御指導が今後の活動を明確にしました。

課題としては①今後の食の指導の継続的な興味・関心②教育課程の中での『食の指導』の時間確保があげられます。

4．おわりに

今年度の「元気もりもり200倍集会」はパワーアップし、ワークショップは学習したことが深化された集会となりました。家庭・地域との連携を心がけ実践した結果と思います。

将来、この子どもたちが農業県秋田の原動力となり活躍してくれることを願っています。

『共に考え　認め合い　楽しく実践する　特別活動』を目指して

大仙市立大曲小学校　教諭　相　澤　比呂子

国立教育政策研究所から特別活動の研究指定を受け、『学級活動』と『異年齢集団活動』の２つを柱に実践研究を進めてきました。

【実践】

(1)　学級活動《気付き・発信・共有化・議題化・話合い・分担・実践・振り返りの８つの場面のサイクル》の充実

◇話合いの活性化と楽しい実践のために

よりよい考えを求めて討議し、１単位時間で決定を図ることを目指して以下のような取組をしてきました。

・図式化した合意形成プログラムの作成
・集団討議を十分に確保するために話合いのスタートを工夫する
・「めあて（内容）」と「話合い方」の２つに分けた振り返り
・実践後の振り返りの重視

（話合い活動）

◇よりよい学級づくりのために

（お世話になっているおじさんに）

・自分たちの目指す姿として学年・学級目標づくりを大事にし、その達成を目指そうとする意識をもたせる
・いごこちのよい学級づくりのためのアンケートとその活用
・お互いのよさに気付くような日常活動の工夫

(2)　異年齢集団活動の充実

異学年同士のふれあいを通して、いたわりや尊敬、我慢、協力などよりよい人間関係のもととなる心情や態度を養うことをねらいとして、「たてわり遊び」や児童会活動などで「たてわり活動」を行ってきました。

【子どもたちの変容】

“時間内に決めたい”という思いが，話合いの活性化と「話合いの力」の向上につながりました。そして、話合いを生かした実践を重ねたことで、集団意識が高まり、人間関係も向上していることが、「学級づくりアンケート」にも表れています。また、話合いや実践の成功で得られた達成感が次の活動の意欲と自信になり、自発的・自治的な取組が活発化し、児童会活動などにも広がっていきました。特別活動の充実が、子どもたちの笑顔と学校の活性化につながることを実感しました。

全国学力・学習状況調査等を活用した学校改善の推進に係る実践研究

大仙市立太田中学校　教諭　阿　部　光　教

１．はじめに

４月に実施した全国学力・学習状況調査を独自に採点・分析したところ、学んだことを実生活や実社会に活かそうとする意識や学んだ知識や技能を活用して考える問題の正答率が低いことがわかりました。こうした生徒の実態を受け、「知識・技能を活用する学習活動を取り入れた授業の工夫と改善」というテーマのもと、ＰＤＣＡＣＡのサイクルをつくり、「習得」「活用」をキーワードに授業改善を進めてきました。

２．研究の具体

(1)　３つの「わ」のある授業の工夫
（笑い、ワクワク、わかったという声）

授業においては、特に導入に力を入れ、生徒たちに問いをもたせる教材の工夫を行い、生徒の知的好奇心に揺さぶりをかけるような学習活動を行いました。

(2)　習得した知識・技能を活用し、表現する学習活動の工夫

実生活・実社会とのつながりを大切にした課題や教材の開発に努め、授業においては互いの考えを伝え合い、自分の考えや集団の考えを発展させる場を設定しました。

(3)　研究のチェックと軌道修正

検証テストの結果や夏休み中の校内研修会から、習得と活用のバランスを重視した授業改善をめざしていくことを確認し、各教科ごとに具体的なポイントを明確にしながら、授業実践していくことにしました。

３．研究の成果

(1)　12月の検証テストや学習意欲に関するアンケート調査の分析から、学年が上がるにつれて、５教科で学習意欲の向上がみられるようになりました。

(2)　生徒が課題解決に向けて、習得した知識・技能を活用しながら、一人で試行錯誤する姿やグループなど仲間と意欲的に課題解決にむけて取り組む姿が多く見られるようになりました。

４．おわりに

全職員が同じベクトルで授業改善に取り組んだことにより、数値だけではとらえることができない生徒の豊かな表情や心の成長にもつながり、「学校が好き」と答える生徒がさらに増えました。今年度の取り組みを新たなスタートとし、確かな学力を育むために「習得・活用・探究」のバランスのとれた授業実践を積み重ねていきたいと考えています。

県南地区公立幼稚園教育研究協議会（通算84回）公開保育を終えて

大仙市立太田ひがし幼稚園　園長　倉　田　吹紀子

1．はじめに

田園と緑と花に囲まれた太田城址の一角にある園舎は、恵まれた環境にある。この環境を生かし活かされる遊びや生活の充実を願い、「恵まれた環境（自然や人々）の中で、積極的に働きかけ、生活を豊かにしていく態度や力を育む」ための環境の構成や働きかけを考え、遊びに効果的に結びつけていく。

2．研究主題

遊びで育ち、遊びで学ぶ
（子どもが出会う環境から＝
“きらきら・わくわく・まっすぐな心”）

3．子どもが出会う環境のキーワード〉

○「きらきら」とは
・人と心を通い合わせる生活
・喜びや悲しみを共有し合う心
・命あるものを大切にする心

○「わくわく」とは〔生活と遊びの充実〕
試行錯誤を繰り返しながら、自分で生活し相手の思いに気づいたり、自分の思いを伝えたりして生活の幅を広げていく充実感

○「まっすぐな心」とは
・愛されている（めんこがられている）という実感
・素朴な子どもらしい心の動きと表現
・身近な環境に働きかけて、遊びを広げていく心

4．研究の仮説

○身近な人たちと、幼稚園生活を共にしながら、感動を共有し、イメージを伝え合う体験を豊かにしてその中で一人一人の幼児の特性や、発達段階を配慮した援助をすることにより望ましい人間関係を再構築する素地が養われるのではないか。

○子ども達が、自然や人々に日常的に触れ合い身近に感じられるように、計画的に環境や行事を体験していくことで、子ども達が自然の力や人々の心の温かさに自ら気づき親しみを持つのではないか。

5．研究の重点

○子どもが出会う環境・人とのかかわりの年間計画の立案と作成
○自然環境について設定計画の作成と活用
○幼児個々の必要な保育・指導にかかわる共通理解と家庭との連携
○全職員による保育カンファレンス

6．研究の進め方・視点

○恵まれた環境の実態と各々の教育的意義を具体的に理解し把握することで、子どもへの気付かせや指導援助が効果的になり、子ども達の周囲の環境への関心が高まり、関わる力が育つのではないか。

7．研究協議会より

期日　平成20年10月21日（火）
公開保育と、各園・会員の実践の営みの事例カードを活用しながら「PDCA」・「深まり」を焦点化し、「環境構成・援助」を中心に協議する。

8．成果と課題

・毎日の生活の中で、五感をとぎ澄ました心をもって自然や人と接しかかわっていく子どもの姿を意識した保育で、子ども達が周囲の環境に興味関心を高め楽しむようになり、探索欲求が学びにつながると考える。

・地域の自然を生かした遊びや行事は、保護者や　家族・地域とのつながりと協力、感動を共有できる体験への理解も大切であると実感する。
・心も体も元気“きらきら・わくわく・まっすぐな心”の子どもを育てていくためには、一人一人の発達を長いスパンで捉え、今後も“自然・人・もの”との出会いや関わりを探り、幼児理解ときめ細やかな援助と環境の構成を工夫していきたい。

伝統ある６つの学校が１つになり　新しく歩み始める
～「協和小学校の開校」～

大仙市立協和小学校 教頭　今　野　天　美

１．沿　革

・明 7．5.13　小種小学校開校
・明11．5.11　峰吉川小学校開校
・明12．7．6　稲沢小学校開校
・昭52．4．1　荒川小学校開校
（大盛小・旧荒川小が統合）
・昭55．4．1　淀川小学校開校
（中淀川小・旧淀川小が統合）
・昭57．4．1　船岡小学校開校
（沢内小・旧船岡小が統合）
・平20．4．1　協和小学校開校
（小種・峰吉川・稲沢・荒川・淀川・船岡の６校が統合）

２．校　章

真ん中の円はみんなが仲良く協力する姿を、そしてその円を中心に、旧協和町の花「おんこ」をイメージした葉っぱ。さらに、新しい未来への飛翔を表す翼をあしらいました。それぞれの６枚の葉っぱと翼は、６つの小学校を表しています。

＜デザイン原案：Ｙ・Ｎさん（協和中生徒）＞

３．開　校

【始業式】

４月４日（金）午前９時、ピーンと張り詰めた空気の中での始業式。今でも忘れられないのは“校歌”の歌声です。圧巻でした。統合への子ども達の期待、統合に向けての旧６小学校の先生方のご指導と熱い思い、地域の方々の思い、涙が止まりませんでした。

【開校式典】

４月26日（土）午前10時、栗林次美市長をはじめたくさんの関係者の方々からご出席をいただき、開校式典が厳粛に行われました。三浦憲一教育長から森元憲美校長に「校旗」がしっかり手渡されました。新生協和小学校の歴史が刻まれた瞬間でした。

４．校　是　～『協働』

過程を互いに共有し、かかわり合うことによる共生的・互恵的相互関係

５．教育目標　～『自立への芽をはぐくむ』

教育目標達成にあたり、職員の共通理解のもと次のような具体的な方針を立てました。

○知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな子どもの育成。
○自己有用感や自尊感情を育み、どの子にとっても居心地のよい学級・学校。
○授業を研究し続け、絶えず向上心をもち続ける教師。
○諸機関との連携を図り、開かれた学級・学校づくり。

６．本校の特色

スタートして１年、特筆すべき特色として次のようなことがあげられます。

①　広域学区

児童の約７割がバス通学です。朝7時40～50分の間に９台のバスが学校の敷地内にあるロータリーを往来します。「安全第一」をモットーにしながら、小中あいさつ運動展開のいい場面でもあります。

②　小中連携の推進

協和中学校と様々な分野で連携を図り、小中の長期的なスパンで子どもを育てていこうとしています。一例を挙げると●朝のバス指導●授業研究会の交流●教務・研究主任・生徒指導合同会議●小中合同学校評議員会の設置等があります。

③　学校支援地域本部事業の立ち上げ

地域の人の力をお借りして子どもを育てていきたいという思いで、開校と共に「学校支援地域本部事業」を展開しています。３月下旬まで、延べ200名の方々からボランティアとして学校に来てご支援いただきました。人材バンクには既に155名の登録を数えます。

７．みんなの学校

６つの学校の統合ということで、保護者はもちろん、地域の方々の学校に寄せる期待や思いをひしひしと感じます。ＰＴＡ参観や懇談の出席率は常に９割を超えますし、６月に５日間開催した「みんなの登校日」には、平日にも関わらず延べ260人の来校者がありました。

こうした数字に責任の重さと使命感を抱きながら、子どもも保護者も地域の方も、そして我々職員も、誰もが学校に居る（来る）ことの楽しさを感じられるような協和小学校の２年目を、みんなで創っていきたいと思います。

郷土の偉人に学ぶ
～石川理紀之助の生涯をたどって～

大仙市立西仙北西中学校 教諭　高 橋 悠 葵

大正時代の初め「農聖」石川理紀之助が、学区内の九升田（くしょうだ）地区で農業指導を行なった。この郷土の偉人を題材に、以下のような学習活動を実践した。

1．ねらいと事前学習

・九升田に残る理紀之助の碑や業績について調べる。

2．公開授業（授業構成）

① 班ごとに調べた内容を発表する。
② ＤＶＤを観て感想を話し合う。
③ 理紀之助の和歌から、救済事業に臨んだ心情を考える。

3．事後の活動

生徒が作成した発表資料を農業科学館、学校祭で展示した。

4．成　果

地域を題材としたことで、生徒の意欲的な活動を引き出すことができた。理紀之助や地域の人々の努力に触れ、愛郷心を培うことができた。

合い言葉は SUPER ECO SCHOOL
～地域と連携して取り組む環境・福祉教育～
豊成中学校生徒会

大仙市立豊成中学校 教諭　鈴 木　　茂

本校生徒会の空き缶回収活動が始まって、今年で８年目になります。2004年、学校に缶が集まるのをただ待つだけでなく、定期的に地域をまわる「空き缶出張回収」が始められ、これが活動全体を盛り上げる大きなきっかけとなりました。今年度の収益金は、施設への車椅子寄贈、四川大地震等への募金、大仙市への寄附とすべて「世のため、人のため、地球のため」に遣われています。

夏のにおいや冬の寒さが大変なこの活動は、決して楽なものではありませんが、世のため、人のために役立っているという充実感が、私たちを「これからもこの伝統を受け継いでいきたい」という気持ちにさせています。

▲夏の大規模回収の様子

わくわくふるさと どきどきキャンプ

大仙市立内小友小学校 教頭　中 山 厚 子

今年度から文科、農水、総務の３省が連携して実施する「子ども農山漁村交流プロジェクト」において国モデル校に指定され340万円の予算による全校キャンプの計画が進められました。

全校児童が６月は“あきた白神体験センター”10月は“仙北市の農家”に各２泊３日の宿泊体験をしました。縦割り13グループが13農家に民泊した秋の活動では、芋掘りや栗拾い、牛の世話などを行い、体験は児童が新聞や劇、川柳などで表現，発信しました。（詳しくは本校ＨＰやＤＥネットで紹介しています）

本事業は民泊が必須とあって当初不安も感じましたが、実際は児童が生き生きと主体的に取り組む活動となり、自立や生きる力の基盤づくりに結びつくよい機会となりました。

キャリア・スタート・ウィーク

大仙市立平和中学校 教頭　佐 藤　　晋

５月末のフレッシュワーク秋田での事前研修を皮切りに、２年生73名が６月30日から７月４日までの５日間、キャリア・スタート・ウィークを行いました。教育委員会や商工会議所の支援の中、市内29事業所が大変協力的に本校生徒を迎えてくれました。

各職場２～４名に分かれた生徒たちは、職場の方々が見守る中、製造や運搬、接客、介護等、第一線の職業人と肩を並べて職業体験をしました。初日の「緊張」から「覚える」・「慣れる」・「考える」を経て「感動」の最終日まで、限られた期間でしたが、それぞれ人生初の得難い体験ができました。事後のレポートには「挨拶の大切さ」や働くことで初めて気づいた自分の良さや欠点など体験に基づいた様々な感想があり、地域の温かい眼差しの中、生徒は多くの「財産」を得ました。

認定こども園を目指して

大仙市立かみおか幼稚園 副園長　佐藤徳美

1．元気はつらつな子どもたち

昨年11月に神岡保育園とかみおか幼稚園は幼保一体施設として新たな歴史をスタートさせました。木の温もりある広い園舎と豊かな自然に囲まれた環境の中で、0歳から就学前までの子どもたちが元気に体を動かし、友達との遊びを楽しんでいます。特に年長児が小さな子に優しく世話をする様子や、嬉しそうに大きい子を見上げる年少さんの姿などには、心温まるふれあいを垣間見ることができます。

2．Yes We Can

この4月、大仙市初の認定こども園として動き出すにあたり、就学までを見通したカリキュラムの作成は、大きな挑戦です。神岡らしいエッセンスを出しながら一貫性のある教育・保育を目指すために、職員間の意識向上と連携プレーは必須であり、課題にもなっています。私たちは今、Yes You Canではなく、We Can の姿勢でその役割を果たしていきたいと考えています。

地域へ発信する連携を願って

大仙市立藤木小学校 教頭　柴田和子

本校は保育園や中学校にも近く、連携には恵まれた環境にある。今年も合同活動や異年齢交流など活動の喜びや自己有用感に繋がる交流が見られた。

① 5年宿泊体験を角間川小と合同開催
② ドリームワールド（校庭のペイント）
　講師（中学校美術教師）の依頼
③ 3年生、藤木保育園七夕祭に参加
④ 1・2年フェスティバルに園児招待
⑤ スクールバンド部、角間川小と合同バンドを結成。音楽祭に出演（年2回）
⑥ 小・中合同清掃活動（雨天中止）
⑦ 校内研究授業へ教員の相互参観
⑧ 南地区母親委員会で食育アンケートを実施。食育指導の重要性を保護者に啓発。

これらの活動は、子供たちの意欲的な参加が満足感や達成感となって学校の活性化に繋がっている。連携を計画的に進めるためには体制づくりが急務である。保・小・中が絆を深め、地域へ発信していく連携を目指したい。

中高連携の第一歩

大仙市立大曲西中学校 教諭　佐々木泰宏

本校では中・高連携の第一歩として大曲農業高校との連携の機会を得ました。手探りでの研究でしたが、高校の教師による専門性の高い授業を演示していただき、多くの収穫を得ることができました。今年度の取り組みについて以下に紹介します。

1．技術・家庭科（家庭分野）での連携

・「生活の自立と衣食住」において、栄養バランスについての学習と学校農園で収穫した野菜を使っての調理実習。
（各グループに高校生が1名ずつ入っての実習）
・「家族と家庭生活」において、消費生活についての学習と使わなくなった傘の布を利用したエコバッグの製作。
（高校生とペアを組んでの製作活動）

2．農園活動での連携

本校で毎年行っている農園活動の講師に高校の教師を招き、農具の使い方、苗の植え方等について指導していただいた。

今後は他教科や生徒会活動、部活動での連携も視野に入れながら中高連携を継続していきたい。

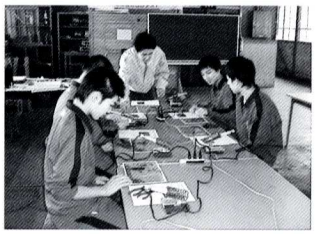
大曲工業高校との連携

大仙市立仙北中学校 教諭　須田　達

1．活動の内容

3年生選択技術の生徒20名が参加し、各コース5人ずつにわかれ、活動を行いました。

○ブラシカー製作…歯ブラシにモータの振動を与えて走らせるブラシカーの製作をする。
○電子ピアノ製作…プリント基板の実際と製作方法の学習、電子ピアノの製作をする。
○鉢置き台製作…実際の木工機器による加工実演と木製の鉢置きを製作する。
○測量体験…測量機器を使った高低差の測量と、光波測距儀による距離測定をする。



▲電子ピアノ製作の様子

2．活動を終えて

ものづくりに対してさらに興味がわいた。この体験をもとにものづくりの勉強を頑張っていきたい。（生徒感想）

専門的な内容や高度な技術にふれることができ、貴重な体験をすることができました。また、進路の選択決定にも大いに役立てることができました。来年度も引き続き交流を深めていくことができればと考えています。

お兄さん・お姉さんと How are you?

大仙市立大曲小学校 教頭　小　西　　肇

平成21年度からの学習指導要領移行を前に、学級数の多い本校でどのような外国語活動ができるかを模索していたところ、大曲高校英語科の皆さんのお力をお借りしたらというアイディアが出されました。早速、高校に相談したところ快諾して頂き、10月から3回（4～6年1回ずつ）に渡って高校生との交流英語活動を行いました。

高校生が各クラス7・8人入り、簡単な英語を使って小学生と高校生が触れ合う活動を中心に授業を設定しました。

1　始めのオリエンテーション（学年全体）
　・ＡＬＴの先生と一緒に今日のキーセンテンスとゲームを知る
2　キーセンテンスを使ったゲーム（各学級）
3　お礼の言葉

大人数の本校でも、高校生の力を借りて子どもたち一人一人に活動場面を設定できたのが一番の収穫でした。

大仙市立中学校生徒海外派遣事業
～ケアンズの大自然の中で～

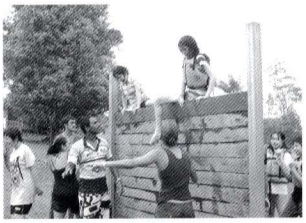
大仙市教育研究所

今年度は市内6中学校から19名が参加し、8泊9日間の日程でオーストラリア「ケアンズ」の大自然の中で研修をして来ました。

あいにくの雨で、野外活動のほとんどはびしょぬれ・泥まみれになりながらでしたが、不平不満も言わず現地の学生と楽しむ様子にはたくましさを感じました。夜のダンス交流では、オージーブッシュダンスを教えてもらう一方でドンパン音頭を披露してくれる生徒もいました。

3泊4日のファームステイはホストファミリーと心あたたまる交流・思い出ができたようで、涙して別れている姿が印象的でした。

将来この研修の成果が1人1人の子どもたちにどのような形となってあらわれてくるのか、楽しみにしているところです。



大仙市中学生サミット
「REVO(レボ)プロジェクト」始動

大仙市教育研究所

あいさつ向上を目指した「おはようプロジェクト」。各学校でさまざまな活動を展開し、大きな成果をあげました。しかし、「知らない人とのあいさつは難しい。」「地域の人と顔見知りになることが必要」という声が寄せられました。

そこで、平成20年度、新たに「REVO（レボ）プロジェクト」を進めることを決定。「REVO」とは、「Recycle（リサイクル）」「Eco（エコ）」「Volunteer（ボランティア）」の頭文字からつくった造語です。地域づくりも環境問題も、基本は同じ、相手への思いやり。みんなで足並みをそろえて実践することにより、大きな成果が得られるとともに、人間関係も深まります。全小・中学校、さらには地域住民にも広く発信し、一体感を持てる活動、成就感・充実感が得られる活動を目指します。

平成20年度 教育研究所のあゆみ

1．教職員研修会

①生徒指導主事研修会
　・「保護者対応の在り方」について意見交換を実施した。即時、複数対応以外にも初期対応の重要性が確認された。

②教務主任研修会
　・「新学習指導要領移行措置への対応」について南教育事務所小笠原主任指導主事より講演をいただき情報交換を行った。

③研究主任研修会
　・「授業改善への取組」や「移行措置の実際」について情報交換を実施した。

2．学校訪問

①前期訪問では「全体会」を実施し、市の教育方針を共通理解する場を設定した。

②後期訪問では「学力向上への取組」について、成果と課題、改善の手立てなどを確認しあった。

3．学力向上

・全国や県の学力・学習状況調査結果の分析と情報提供を実施した。改善に向けた手立てとして、全国や県の学力・学習状況調査結果をもとに学力向上推進委員会が作成したフォローアップシートを各校に提供した。

発　行　大仙市教育研究所
〒014-0053 秋田県大仙市大曲花園町 4-88
TEL 0187-63-9400　FAX 0187-63-9401
E-mail om-kyouken@edu.city.daisen.akita.jp